

## コロナ禍と今後のICTに関して

著者	岡田 芳樹
雑誌名	関西大学インフォメーションテクノロジーセンター 年報 : ITセンター年報
巻	10
ページ	1-1
発行年	2020-11-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00021351">http://hdl.handle.net/10112/00021351</a>

## コロナ禍と今後の ICT に関して

インフォメーションテクノロジーセンター副所長  
環境都市工学部教授 岡 田 芳 樹

この原稿を執筆しました2020年6月末の時点において、新型コロナウイルス感染症の影響で、われわれの社会活動がいろいろな面で制限を受けています。教育活動においても、コロナ禍以前の状態にはいまだ戻っていません。本学においても、一部の授業を除いて、依然遠隔授業を余儀なくされています。このような状況のもと、遠隔授業を行っていて感じるものの一つとして、会話する相手の顔を見ないで話をするものの難しさがあります。常に相手の表情から相手の気持ちや受け取り方を推し量りながら会話をすることに慣れているので、相手の顔が見えないと非常に話しにくいと感じます。しかし、その反面、学生の顔が見えないので、その顔を想像しながら、こちらの話がどれほど伝わっているのかを常に推測しながら、そして、よりうまく伝わるように常に意識し心の中で学生と対話しながら講義をしています。以前の通常の対面授業の時より、話の内容の質が向上した講義ができているのではないかと考えます。受け手の学生側においても、他の学生の顔が見えないことからPC画面に気持ちが集中しているからか、対面授業の時より教員の話をよく聞いているようで、遠隔授業を始める前に想像していたよりも学生は講義に集中しているように感じます。また、全ての学生とは言えないかもしれませんが、学習する意義を再確認し自主性が向上した学生も多いと考えます。この不便な状況下での遠隔授業が、教員と学生の両者に教育の原点を気づかせてくれたことは逆に良かったのではないのでしょうか。

また、このような状況のもとで情報機器を駆使する機会が増えたことは、教員や学生のICT能力の向上につながり良かったと言えます。そして、ICTのメリットをより強く感じる反面、以前にも増して、ICT利用者のモラルがより重要であること、かつICTの上手な使い方、人間とICTとの共存のあり方をわれわれはより一層深く知らないといけないことを痛感します。

例えば今後ますます必要性が増すだろうAIやIoTに関して、教員も含め全ての学生が、理系、文系を問わず、それらの概略や簡単なしくみなどを知る機会を持つことが、われわれの今後の一般社会生活を送っていくうえで必須であると考えます。その内容は、AIやIoTの専門家を育成するための高度な内容ではなく、それらの技術とうまく付き合っていくための最低限の知識を得るためのものです。また当然、情報セキュリティーやリテラシー教育を、講演会や授業などの形で、学生や教員のモラル意識の向上につなげることも必須です。

関西大学の様々なICTサービスを提供しているITセンターにおいても、教育部門と連携しながら、ICTと上手に付き合える人間をつくるための活動に今後ともより積極的にコミットしていく必要があります。皆様からもその活動に対するご支援を賜りますように宜しくお願い申し上げます。